

(1)人口という言葉 / 食べることの重み示唆

2015年6月9日

「人口」という言葉は、実に言い得て妙です。人口には、人の口に上るということで、「世間のうわさ」という意味もありますが、「人の数」という意味もあります。ここでは、後者の方に着目しましょう。

人の数を、「口(くち)」をもって表すのは、食べることが人間にとって本質的に重要であることを示唆しています。むろん、食べると言っても、単に野にあるものを食するのではなく、意識的に食料を調達することを含みます。人口問題は食料問題にはかならず、そして、食料問題こそがあらゆる社会問題の根底に存在していると言えましょう。

人口や食料に関しては、いくつかの理論や学説があり、また、移民、貿易、日常生活なども、その背景には食に関することが見え隠れします。

今回から6回にわたって、食をめぐる社会問題や経済問題について、考えてみたいと思います。

(2)人口の学説 / 食糧難予測、各国に影響

2015年6月10日

人口に関する学説と言えば、マルサスの人口論を想起する方も多いでしょう。

マルサスはイギリスの経済学者であり、その『人口論』は、1798年に、何と、初版は匿名で刊行されました。人口と食料についての悲観的な結論を公表することに、躊躇(ちゅうちよ)するものがあつたのかもしれませんが。

その理論は、きわめて明快です。人口は制限されなければ幾何級数的に増加するが、食料は算術級数的にしか増加しない、というものです。そして、この論理から、もし人口が制限されなければ、食糧難や貧困が必然化することを導きだしたのです。

以降、この考え方は、多くの国で、さまざまな形で影響を与えることになりました。

ところで、減反政策を実施し、人口減少を憂慮する昨今の日本を、マルサスはどのように見るのでしょうか。聞いてみたいところです。

(3)移民の背景 / 人口・食料、国策見え隠れ

2015年6月11日

つい近年まで、人口問題と言えば、もっぱら過剰人口をどうするか、食料不足をどうす

るか、という問題でした。そうした中で、移民政策がとられたのです。

日本でも明治以降、断続的にですが、移民政策が実施されました。ハワイ、ドミニカ、アメリカ、ブラジル、ペルー、フィリピン、満州(中国東北部)、北米・中米・南米、そして、アジアなど、実に広い範囲に移民を送り込んでいました。例えば、20世紀初頭の日本の人口は、5千万人に達していなかったにもかかわらずです。

最近では、日本の人口減少傾向から、外国人労働者を受け入れるべきだとの議論もあります。

移民は、形式的には個人の意思によるとされますが、その背後には、国策が見え隠れします。昨今では労働問題として扱われることもあります。その根底には食の問題が横たわっていることは言うまでもありません。

(4)食料自給率 / カロリー・ベースと金額ベース

2015年6月12日

日本の食料自給率の低いことがしばしば話題になります。昨今の値では、自給率はほぼ40%程度です。このような数字を示されると、重い気分になります。

ところで、実は、食料自給率の計算式には、よく使われるものとして、2種類があります。その一つが先の値を導く「カロリー・ベース」と呼ばれるもので、カロリーを基準として自給率を計るものです。この式では、カロリーのほとんどない野菜類は計算に入らないこととなります。

それに対して、「金額ベース」で計るのがもう一つの方式です。全ての食料を金額で表し、自給率を計算するものです。これによれば、日本の自給率は約70%に跳ね上がり、必ずしも低いものではありません。

もっとも、日本の食料貿易では、圧倒的に輸入超過です。

食料の自給率を考える場合には、こうした点を広く考慮に入れる必要があると思われます。

(5)フードマイレージ / 日本の環境負荷、際立つ

2015年6月13日

「フードマイレージ」という言葉があります。これは、食料の輸送量(重量ベース)に輸送距離を掛けた値であり、食料の輸送に伴う二酸化炭素排出の環境負荷を示すものでもあります。

つまり、食料の輸入量が増えれば、また、より遠方からの輸入がなされれば、フードマイレージの値は大きくなり、反対に、いわゆる食料の「地産地消」が増えれば、この値は小さ

くなります。

日本の1年間のフードマイレージは、約 9 千億トン・キロメートル。これは、韓国・アメリカの約 3 倍、イギリス・ドイツの約 5 倍、フランスの約 9 倍と際立って大きくなっています。

また、1人当たりでも、韓国の 1.1 倍、フランスの 4 倍、アメリカの 7 倍と、やはり高い値を示しています。

このフードマイレージは食料問題を考えるうえで、重要な指標になると考えられます。

(6)石と反 / 米を基準に単位定める

2015 年 6 月 14 日

かつて、単位として、石(こく)と反(たん)という言葉が使われていました。

成人は、かつて、1食に米1合、1日に3合を食すると言われました。1石は、成人1人が1年間に消費する米の量とされました。例えば、仙台藩は、時代によっても異なりますが、60数万石だったので、人口は60数万人ということになります。

また、1石の米を収穫することができる面積を1反と言います。これを現代のメートル法に換算すると、1石は180リットル、1反は991平方メートル(約10アール)になります。

現在の日本では、かつてより、1人当たりの米の消費量は半分以下になり、また、面積当たりの米の収穫量は4倍になっています。

いずれにしても、こうした度量衡が米を基準として決められてきたのは、興味深いことです。食料問題の本質的意味が反映されていることを示しています。